

# 時間的遠近の強調的表示について

## —朝鮮語の時間語彙を中心に—

川畑 祐貴

**【要旨】** 本稿では、朝鮮語の時間語彙を対象として、「時間的遠近」の表示における表現的な音韻・形態の「強調」現象（母音の長音化、形態の重複）の適用可能性について分析と考察を行なう。「母音の長音化」と「形態の重複」が時間語彙に適用される可能性を朝鮮語母語話者 3 名に調査したところ、「母音の長音化」の場合、mak や kas, kot を除いて、おおむね適用可能であった。第 1 音節で生じる長音化と第 2 音節以降で生じる長音化とはその「強調」の機能がやや異なり、専ら第 1 音節での長音化において「今の断絶性」や「現在性」、「切迫感」などの程度に関する「強調」が見られた。「形態の重複」の場合、遠近ニュアンスを含意する直示的時間語彙には適用不可だが、明示的な非直示的語彙では許容される。なお、程度の意味が強められるというよりは、事態に対する多回的で分配的 (distributive) なニュアンスの発生が主であった。\*

**【キーワード】** 時間的遠近, 程度性, 直示性, 母音の長音化, 重複

### 1 はじめに

本稿では、事態を時間軸上に位置付ける時制的な表示現象のなかでも、事態時点と発話時点 / 参照時点などとの時間的遠近関係を表示する現象について考える。特に、朝鮮語の時間語彙を対象として、「時間的遠近」の表示における表現的な音韻・形態の「強調」現象の適用について調査、分析および考察を行なう。

時制的な表示現象を考える場合、事態時点と発話時点 / 参照時点との順序・位置関係を捉えることが多い。しかし、本稿が前提とするのは、そのような点的関係の把握ではない。時間軸を程度スケールに見立てた上で、時点間の距離 (distance) / 間隔 (interval) に対して、「時間的程度性」という観点から捉えようとする仕方である。その中であって「時間的遠近」は、時間的程度性の現れ方の一つではないかと思われる。

また、「遠近」は本来、主観的な認識性を含むものであるが、表現的な「強調」現象（母音の長音化、形態の重複など）もそうした主観性、認識性を含みうることを踏まえ

---

\* 本稿は TUFUS グローバル・スタディーズ学会 2022 年度 (第 3 回) 大会 (2023 年 2 月 11 日, オンライン) にて発表した内容に大幅な加筆・修正を行なったものである。本稿の執筆にあたり、2 名の匿名査読者、千田俊太郎先生、韓旼池氏、葉晨傑氏からは数々の貴重なコメントを頂いた。記して心より感謝申し上げます。また、調査に協力してくださった 3 名の朝鮮語母語話者の方にも感謝申し上げます。なお、本稿に残る不備は全て筆者の責に帰すものである。

ると、「時間的遠近」と「強調」は互いに関連を持つといえる。「強調」を時間語彙で以て分析してみることで、時間というものがどのように展開されるのか、「時間的遠近」の潜在的な程度性がどのような特徴を持つのかを捉えることが可能となりうる。

本稿の構成は次の通りである。研究の対象や目的を述べた1節につづいて、2節では朝鮮語の時間語彙(2.1)と時間的遠近の表示(2.2)について説明を行なう。本稿のトピックの一つである「強調」については3節で概観する。3.1で「強調」について述べた後、3.2にて音韻や形態の操作に伴う表現的な「強調」ニュアンスの生起を取り上げる。そして、4節では朝鮮語の時間語彙に観察される表現的な「強調」の出現に関する調査を行ない、分析結果と考察を示す。5節で本稿の内容をまとめる。

本稿では朝鮮語のローマ字表記に S. E. Martin による Yale 式ローマ字表記を用いる。また、用例などの引用に際して、引用箇所右下部に出典を明記する。なお、特に断りの無い場合は筆者による作例である。

## 2 朝鮮語における「時間的遠近」の表示について

### 2.1 朝鮮語の時間語彙

朝鮮語は、時制的意味に関連する文法形式として、現在や習慣、一般的事実などに対して用いる「-n/nun-」、過去や完了の「-ass/ess-」、直接経験に基づく回想の「-te-」、大過去の「-assess/essess-」、未来や推測の「-keyss-」などを有する。一方で、「対象となる事態が具体的に時間軸のどの程度の位置にあるのか」、すなわち「事態の具体的な時間的位置付け」については、それら文法形式のみでは十全に表現することは叶わず、一定の語彙的手段(時間語彙)や語用論的要素に頼る必要がある<sup>1</sup>。

時間語彙とは、文字通りに時間的意味の表現に関する語彙のことだが、朝鮮語学分野では時間語彙の意味的な分類研究が比較的盛んに行なわれてきた(チェ=ヒョンベ1937, パク=ソンジャ1982, ウ=イネ1991, ミン=ヒョンシク1990, 1998, ホン=ジョンソン1991, イム=チェフン2003, ポン=ウォンドク2004など多数)。ある語彙の集合を分類し体系化するためには一定の分類基準が必要となるが、時間語彙分類に関する先行研究は、時制的な意味と相(アスペクト)的な意味の区別に対する認識がその分類において中心的な役割を果たす点で概ね共通しており、その認識を起点にして、

<sup>1</sup> 世界には文法的手段で具体的な時間的位置付けを表現できる言語が存在し、そうした言語の研究では「時間的距離(temporal distance)」や「遠隔性(remoteness)」などの呼称で、具体的な時間的位置付けの現象が扱われてきた(Dahl 1984, 1985, Comrie 1985, Bhat 1999, Mithun 1999, Nurse 2008, Botne and Kershner 2008, Botne 2012など参照)。なお、言語研究における「距離(distance)」という表現に関しては、その定義や指示内容の曖昧さ、用語としての扱いにくさなどから、その使用を避けたり、あるいはより詳細な説明(定義付け)を試みたりする論考も存在する(Dahl 1984: 108, Johanson 2003: 283, Meermann and Sonnenhauser 2015など)。

研究者ごとに独自の区分設定を行なうなどの方法が取られてきた。

朝鮮語の時間語彙分類は概ね上記の方法で進められてきたが、その中でも、ミン＝ヒョンシク（1990, 1998）は本稿の内容を考える上で注目すべき分類を含んでいる。時制的な意味を表す「時制語」の下位に「発話時や事件時現在を基準として一日の中で遠くない過去と未来の時点を指示する時制語」の「相対時刻語」を一つの下位分類に設定している（ミン＝ヒョンシク 1998: 343, いずれも拙訳）。「遠くない過去」と「遠くない未来」とは、すなわち「直前過去」と「直後未来」を指すようであるが、次の(1)はそれぞれの分類に該当する具体的な語彙形式である<sup>2</sup>。

(1) a. 直前過去語

kas 「(～し) たて, (～した) ばかり」, akka 「さっき」, pangkum 「今し方」, kumpang<sup>①</sup> 「今し方」, kumsey 「すぐ, たちまち」, mak<sup>①</sup> 「ちょうど, (～した) ばかり」, camsi-cen 「しばし前」, cokum-cen 「少し前」など

b. 直後未来語

ittaka 「あとで」, kot 「すぐ, 直ちに」, cuksi 「直ちに」, kumpang<sup>②</sup> 「すぐ, まもなく」, palo 「すぐ, 直ちに」, mak<sup>②</sup> 「すぐ, ちょうど」, camsi-hwu 「しばし後」, cokum-hwu 「少し後」など

(ミン＝ヒョンシク 1998: 343, 一部修正, 拙訳)

他の研究では(1)の語彙などに対して、過去・現在・未来の区分のうち、どの時間区分の意味を表す語彙であるかを示すばかりであった。ただ、これまで捨象されがちであった時間的な遠近ニュアンスは、事態を時間軸上に位置付け、言語表現で表す仕組を考える上では重要となる。加えて、時制的意味の表示に「遠近」という程度の要素が関与する点に着目してみると、他の概念・言語表現と時間概念・時間表現との関連を新たに考えることも可能となる。

2.2 では時間的な遠近ニュアンスについて、その概念や表示方法を説明する。

## 2.2 「時間的遠近」について

ある事態が具体的に時間軸のどの位置にあるのかを知る方法として、概念的観点から見ると、客観的な指標や基準を根拠として単位的または数量的に捉える方法もあれば、主観的判断や評価、認識に沿ってその事態の時間的位置を把握し表現する方法も考えられる。

<sup>2</sup> (1a, b) の mak と kumpang に付された①, ②は同一の語彙が過去と未来をともに表すことができることを示す。

まず、前者の単位的、数量的な表示は、たとえば次の (2) のような例が想定される。

- (2) a. マイケルズの来日公演は今年の秋に開催予定です。  
 b. 彼は 30 分前に日本に到着したみたいです。  
 c. 彼は今、日本に到着したみたいです。

(2a) では、公演の開催時期を「今年」と「秋」という区分を用いることで表現している。また (2b) では「分」という時間単位を用いつつ、「30」という具体的な数字を伴い、時間間隔を数量的に示すことで、「彼」の到着時点を表そうとしている。(2c) は「彼」の到着時点を「今」の使用で以て表している<sup>3</sup>。

一方、後者の主観的な表示では、次の (3) のような例が想定される。

- (3) a. ちょうど到着したばかりです。  
 b. mak tochakhay-ss-e=yo.  
 ちょうど 到着する-PST-IFRM=POL  
 「ちょうど到着したばかりです。」

客観的指標・基準に基づく単位的、数量的表示は遠近ニュアンスを明示的に表すものではなく、基準とする参照時点と事態時点との関係の中で、あるいは人間の認知能力や社会文化的な慣習などとの関係において、相対的な遠近評価が含意的に導かれる。一方、主観的な表示では、事態の時間的位置に対する評価 ((3) では近接性) を意味の一部として表す。

川畑 (2022) は、朝鮮語における「時間的遠近」の表示に関して、遠近ニュアンスを含意的に示しうる語彙 (4a) と遠近ニュアンスを明示する語彙 (4b) への区別が考えられるとしている。

- (4) a. 時間的遠近を含意しうる (例: akka, pangkum, cikum, kumpang)  
 b. 時間的遠近を明示する (例: kas, mak, kot, palo)

たとえば (4a) の akka 「さっき」や pangkum 「今し方」, cikum 「今」などは専ら直示的な時間語彙であるが、これらは時間領域「今、現在」つまり直示の中心と事態との時間関係を示す。時間領域「今、現在」に対して、対象とする事態がその領域外にある

<sup>3</sup> 発話時以前に到着したとしても「今」と表現すること自体は可能である (Specious Present, Extended Now などと呼ばれる)。

と判断・評価する場合は akka 「さっき」、領域内にあると捉える場合は pangkum (方今) 「今し方」や kumpang (今方) 「今し方」が使用されうる (川畑 2021: 23-36) .

一方, (4b) に関して, kas 「(～し) たて」や mak 「ちょうど, (～した) ばかり」, kot 「すぐ, 直ちに; まさに, すなわち」, palo 「すぐ, 直ちに; まさに, すなわち」などは, 参照時点と事態時点との時間的關係に対して, 積極的な遠近的評価を示すものである.

つづいて, 品詞の観点から遠近ニュアンスの表示方法を考える. 日本語の「近い」や「遠い」, 朝鮮語の「kakkapta」や「melta」など, 遠近形容詞を用いて直接的に表現する方法もあれば (5) , 時間名詞や時間副詞などを用いて遠近ニュアンスを表現する方法も考えられる (6) .

(5) a. 起きてみると, 正午に近い時間だった.

b. ilena po-ni cengo=ey kakkawu-n sikan-i-ess-ta.  
起きる.INF 見る-SEQ 正午=LOC 近い-PRES.ADN 時間-COP-PST-DEC  
「起きてみると, 正午に近い時間だった。」

(イム=ジリョン 2002: 210, 一部修正)

(6) a. ちょうど到着したばかりです. (=3a)

b. mak tochakhay-ss-e=yo. (=3b)  
ちょうど 到着する-PST-IFRM=POL  
「ちょうど到着したばかりです。」

(5) の場合, ある事態時点 (起床時点) を他の時点 (正午) に対して時間的に「近い」ものと判断し, その在り様を形容詞「近い」や「kakkapta」で表現したものである.

(6) では, そうした「(時間的に) 近い」というニュアンスを, 形容詞ではなく「ちょうど～ばかり」や時間副詞 mak などの使用で以て示している.

なお, ここまで「遠近」という表現を用いてきたが, 「時間的距離」や「時間間隔」は「遠近」に代えて, 「長短」で捉えて (7) のように表現することも可能である<sup>4</sup>.

(7) a. デビューまで長い時間を要した.

b. It took a long time for our debut.

<sup>4</sup> 身体的経験に基づく認知を重視する認知言語学では, 時間的關係を空間的な「前後」や「上下」, 「遠近」, 「長短」などで捉えるさまを「概念メタファー (conceptual metaphor)」に関する重要な現象の一つに位置付ける (Lakoff and Johnson 1980, 1999, Evans 2004, Moore 2004, 2006 など). 「時間的距離 (temporal distance)」という表現もメタファー的であると言える.

- c. teypwi=kkaci      olay-n                  sikan=i                  kelly-ess-ta.  
 デビュー=まで 長い-PRES.ADN 時間=NOM 掛かる-PST-DEC  
 「デビューまで長い時間が掛かった。」
- d. teypwi=kkaci      ki-n                          sikan=i                  kelly-ess-ta.  
 デビュー=まで 長い-PRES.ADN 時間=NOM 掛かる-PST-DEC  
 「デビューまで長い時間が掛かった。」

「遠近」や「長短」などは程度スケールにおける一定の値を取るという点で潜在的に程度性を帯びるといえるが、本稿にて「時間的遠近」と呼ぶ概念は、事態の時点と発話時点 / 参照時点との間隔 (図 1 参照) を「遠近」の程度スケールにて主観的に認識し把握することを指している。

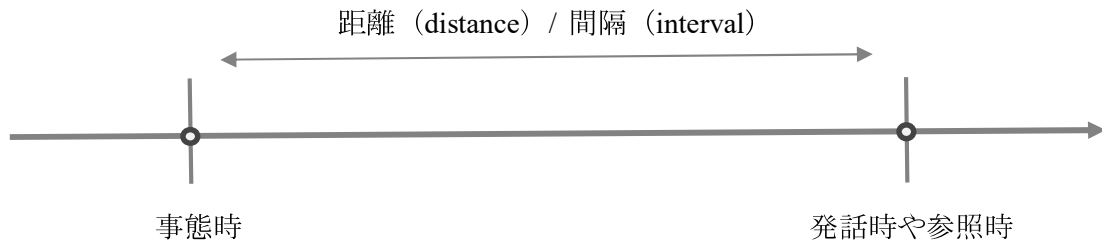


図 1 時間軸における時点の位置と時間的距離 / 間隔

### 2.3 2 節のまとめ

ここまで、朝鮮語の時間語彙と「時間的遠近」について概観し、時間軸における事態の位置付けの中でも、主観的な認識に基づく程度的性質を帯びた方法での時間的位置把握とその表現形式を指摘した。時間軸上で展開される時間的程度性には主観的認識性の性質が介在しうるため、語彙意味やその表現において「遠近」の程度や表現意図を強めるという形で、表現的な「強調」ニュアンスを伴う可能性が考えられる。時間的意味と「強調」は従来関連的に扱われてきた概念ではないが、分析対象とすることで時間の性質とそれに対応する言語表現の在り方を新たな視点から捉えることが可能となる。時間語彙と「強調」ニュアンスとの関係について考えるため、3 節では「強調」的な意味および音韻、形態の操作に伴う表現的な「強調」ニュアンスの発生について述べる。つづいて 4 節では「時間的遠近」に関わる朝鮮語の時間語彙を中心に、特にそれら形式における音韻、形態の操作と「強調」ニュアンスの発生可否について考える。

### 3 「強調」の意味と表示について

#### 3.1 「強調」的な意味

ある表現（語彙）の意味は、本来的に「強調」的であるとされる場合がある。

- (8) a. 太郎さんは優しいです。  
 b. 太郎さんはとても優しいです。  
 c. 太郎さんは優しすぎます。
- (9) a. chelswu ssi=nun chincelha-sey=yo.  
 チョルス 氏=TOP 親切だ-HON=POL  
 「チョルスさんは優しいです。」
- b. chelswu ssi=nun nemu chincelha-sey=yo.  
 チョルス 氏=TOP とても 親切だ-HON=POL  
 「チョルスさんはとても優しいです。」

たとえば, (8a) は「太郎さん」が「優しい」人間であることを表す文だが, (8b) では程度副詞「とても」, (8c) では「～すぎ(る)」が加わることで, 優しさの程度（に関する話者の認識）が一層強められている. (9) の朝鮮語の例でも同様に, nemu「とても」を加えることで, (9a) に比べ, (9b) では優しさの程度が強まっている. こうした程度の強さ, 著しさなどに関連する表現について, Quirk et al. (1985) は強意語 (intensifiers) の分類を示している.

表 1 Quirk et al. (1985: 104-115) における intensifiers の分類

<b>Amplifiers</b>	Maximizers
	Boosters
<b>Downtoners</b>	Approximators
	Compromisers
	Diminishers
	Minimizers

表 1 より, 強意語は程度の大きさを表す **Amplifiers** と程度の小ささを表す **Downtoners** に分けられ, **Amplifiers** はさらに程度の極大を表す **Maximizers** (例: 最も) と程度スケールにて大きい値を取る **Boosters** (例: とても, かなり) に区分される.

以上のような, 程度の強さや著しさの表現は時間に関わる表現にも適用されうる.

たとえば、「長い」や「olayn」を用いた上記(7a)や(7c)の時間表現に「とても」の相当形式を加えることで、デビューに要した期間の「長さ」を強めることができる(10)。

- (10) a. デビューまで長い時間を要した. (=7a)  
 b. デビューまでとても長い時間を要した.  
 c. teypwi=kkaci      olay-n      sikan=i      kelly-ess-ta. (=7c)  
     デビュー=まで 長い-PRES.ADN 時間=NOM 掛かる-PST-DEC  
     「デビューまで長い時間が掛かった。」  
 d. teypwi=kkaci      nemu      olay-n      sikan=i  
     デビュー=まで とても 長い- PRES.ADN 時間=NOM  
     kelly-ess-ta.  
     掛かる-PST-DEC  
     「デビューまでとても長い時間が掛かった。」

このように、一定の時間表現に強意の程度表現を加えることで、その時間的意味を強めることが可能となる。しかし、「強調」ニュアンスは語彙意味として表されるだけでなく、音韻や形態などの操作を通じて随意的に表現することも可能である。次の3.2では、「強調」ニュアンスをもたらす表現的な操作について説明する。

### 3.2 音韻・形態の操作に伴う「強調」ニュアンス

3.2では音韻や形態の操作に伴う「強調」ニュアンスの生起について述べる。朝鮮語の強調表現について論じたクォン＝ジェイル(1983, 1987, 1992)、イム＝ソッキュ(1989a, 1989b)、チョン＝ジョンミ(2008)などは、強調表現は語彙意味で表されるものだけでなく、音韻や形態、統語の操作に伴い「強調」ニュアンスが生じるパターンも存在しうると指摘している。それら先行研究を確認したところ、「強調」ニュアンスを生じさせる操作として、次のようなものがおおむね共通して言及されている。

- (11) a. 音韻的な操作 (例: 母音の長音化, 子音の硬音化)  
 b. 形態的な操作 (例: 形態の重複, 強調的な意味を持つ接辞の添加)  
 c. 統語的な操作 (例: 倒置, 分裂文)

本稿では時間的程度性と強調性の関係を考えるという視点から、(11)でも「音韻的な操作」と「形態的な操作」、特に「母音の長音化」、「形態の重複」を中心に説明する。以下の3.2.1では「母音の長音化」、3.2.2では「形態の重複」について述べる。



### 3.2.1 音韻的「強調」：母音の長音化

現代朝鮮語において、長母音は次のような状況下で実現される（アン＝ビョンソプ 2010, カン＝オンミ 2011 など）。

- (12) a. 長母音が弁別的要素として体言や用言などで実現する場合
- b. 音韻変化に伴う長母音化が生じる場合（代償延長など）
- c. イントネーション句末にて韻律的に長母音が生じる場合
- d. 話者の表現的な態度に伴って随意的に実現される場合

(12a) について、現代朝鮮語の中部方言や西南方言、西北方言などでは母音の長短が（規範的には）第1音節にて弁別的であるとされる。次の(13)はその一例である。

- (13) a. nwun [nun] (目) --- nwun [nu:n] (雪)
- b. mal [mal] (馬, 斗) --- mal [ma:l] (言)
- c. pam [pam] (夜) --- pam [pa:m] (栗)
- d. saki [sagi] (詐欺) --- saki [sa:gi] (士気) (漢字語)
- e. iss-nun [innun] (在-連体形) --- is-nun [i:nnun] (継-連体形) (用言語幹)  
            (ペ＝ジュチェ 2011: 93 より抜粋, 一部修正)

ただし、一般的には、長短の区別自体は認識できるものの、弁別的な要素としては実質的に機能していないようである（キム＝ヘリム・パク＝ミニ 2019）。なお、母音の長短の弁別性については、李崇寧 (1959) にて既に疑問視されており、1950年代当時から長短区別の実質的な機能不全が若年層に顕著であるとの指摘があった。

本稿に最も関連する長音化は(12d)の例である。母音の長短の弁別性の実質的に機能しない状況にあっても、話者の態度に応じて、音声的な現象として母音が長く実現されることがある。こうした現象は「表現的長音<sup>5</sup>」（キム＝チャンソプ 1991, 1994）と呼ばれ、研究が行われてきた（イ＝ビョングン 1986, キム＝チャンソプ 1991, 1994, アン＝ビョンソプ 2010, キム＝ソン Chol 2011, ナム＝ギタク 2012, パク＝ミギョン 2016, Ko Eon-Suk 2017, ファン＝ウナ 2019 など；他の言語での関連研究では、たとえば Bolinger 1961, Woodbury 1987, Kawahara and Braver 2014 など）。それらの研究によると、「表現的長音」は形容詞や副詞で生じやすい傾向があるが、それは「表現的長音」によって生じる「強調」ニュアンスが形容詞や副詞の意味（状態性や程度性など）と

<sup>5</sup> 「表現的長音」という呼称はキム＝チャンソプ (1991) が初出だが、現象の存在自体はそれ以前から指摘されている。

関連しやすいことに起因するようである。

以下, (14) と (15) はそれぞれ日本語と朝鮮語における「表現的長音」の例である。

(14) a. 太郎さんはとても優しいです。 (=8b)

b. 太郎さんはと~っても優しいです。

(15) a. chelswu ssi=nun nemu chincelha-sey=yo. (=9b)

チョルス 氏=TOP とても 親切だ-HON=POL

「チョルスさんはとても優しいです。」

b. chelswu ssi=nun ne:mu chincelha-sey=yo.

チョルス 氏=TOP とても 親切だ-HON=POL

「チョルスさんはと~っても優しいです。」

(14a) では長音を伴わない「とても」が現れているのに対して, (14b) では「とても」の第1音節で長音化が起きている(促音も生じる)。この場合, (14b) は(14a)に比べ, 「太郎さん」を「優しい」と感じる話者の気持ちがより強いものとして実現されている。(15)でも同様に, nemu「とても」が短母音で実現される(15a)に比べて, 長音の(15b)では「チョルスさん」を「優しい」と思う気持ちが強まっている。

このような「表現的長音」は時間語彙にも確認される。たとえば, 「さっき, 先ほど」を意味する akka では第1音節にて長音化が生じる。この場合, 長音の a:kka で実現される(16b)は短音の akka で実現される(16a)に比べて, 「今」との断絶感が強まり, 相対的に「遠い」時点を指すような直感的印象を与える。母音の長さと同時間的な遠さ(時間間隔の長さ)に類像的な相関性が見出されるようである。

(16) a. chelswu=nun akka kheyik=ul mek-ess-e=yo.

チョルス=TOP さっき ケーキ=ACC 食べる-PST-IFRM=POL

「チョルスはさっきケーキを食べました。」

b. chelswu=nun a:kka kheyik=ul mek-ess-e=yo.

チョルス=TOP さっき ケーキ=ACC 食べる-PST-IFRM=POL

「チョルスはさ~つきケーキを食べました。」

(川畑 2021: 35, 一部修正)

ほかにも, オンライン上では次のような例が見られた(17)。

(17) po-camaca pa:lo kyelceyhay-ss-supnita!

見る-as.soon.as すぐ 決済する-PST-POL

「見るや否や, す〜ぐ決済しました!」

(earpearp 社 HP の商品レビューページ 投稿日時: 2022/11/05 19:59:50 (JST/KST)

<https://m.earpearp.com/article/%EC%83%81%ED%92%88-%ED%9B%84%EA%B8%B0/4/85815/>)

(17) は商品に対する購入レビューである。ハングル表記では「〜」のような長音記号 (pa~lo) ではなく, 母音 a のハングルの挿入 (paalo) により示されていたが, いずれにしても palo の第 1 音節の母音が延長されていることは事実である。この場合, 近接性ニュアンスを表す palo「すぐ, 直ちに」で母音の長音化が実現されているが, (16) の場合とは異なり, 母音の長音化に伴い参照時と事態時との時間間隔も延びるということはない。寧ろ, 母音が延びることで時間間隔の短さ (とその認識) が強められる。

### 3.2.2 形態的「強調」: 形態の重複

つづいて, 形態の操作に伴う「強調」ニュアンスの生起について述べる。形態論レベルでの形式の繰り返し現象は「重複 (reduplication)」, 統語論レベルでの形式の繰り返し現象は「反復 (repetition)」と呼ばれるが (Gil 2005), 朝鮮語でも形態論的な「重複」(18a) や統語論的な「反復」(18b) は確認できる。

(18) a. cip~cip

家~家. 「それぞれの家, 家々」

b. mek-ko mek-ko tto mek-ess-ta.

食べる-and 食べる-and また 食べる-PST-DEC

「食べて, 食べて, また食べた。」

(18a) では名詞 cip「家」が重複し, 「家」の分配的複数性を表す。(18b) における動詞 mekta「食べる」の形式的な反復は動作の多回性と相関している。以上のように, 形式が繰り返されることで個数や動作の複数性が示されることがあるが, その発話や意味内容が強調されることもある。(19a) と (20a) では「とても」と nemu「とても」がそれぞれ単独で現れる一方, (19b) と (20b) ではそれぞれ「とてもとても」, nemu~nemu の形で繰り返し現れている。この場合, 形態が繰り返し現れている例では「優しい」と思う気持ちが「強調」される。

- (19) a. 太郎さんはとても優しいです. (= 8b)  
 b. 太郎さんはとてもとても優しいです.
- (20) a. chelswu ssi=nun nemu chincelha-sey=yo. (= 9b)  
 チョルス 氏=TOP とても 親切だ-HON=POL  
 「チョルスさんはとても優しいです。」
- b. chelswu ssi=nun nemu~nemu chincelha-sey=yo.  
 チョルス 氏=TOP とても~とても 親切だ-HON=POL  
 「チョルスさんはとてもとても優しいです。」

このような形式の繰り返しは時間語彙にも確認でき、朝鮮語の辞書にもいくつかの例が記載されている。たとえば、「時間を引き延ばさず、直ちに」の *ellun* には重複形 *ellun~ellun* が見られる。『標準国語大辞典』によると、*ellun~ellun* は *ellun* の意味を「強調」して表しているという (21)。また、「今し方; すぐ, 速く」を意味する時間副詞 *kumpang* (今方) では形態が繰り返され *kumpang~kumpang* となり、「すぐ, 速く」の意味が「強調」される (22)。

- (21) a. sensayng-nim=i mut-nun mal=ey na=nun  
 先生-様=NOM 尋ねる-PRES.ADN 言葉=LOC 私=TOP  
*ellun taytaphay-ss-ta.*  
 はやく 答える-PST-DEC  
 「先生から訊かれたことに私はすぐ返答をした。」  
 (『標準国語大辞典』)
- b. sensayng-nim=i mut-nun mal=ey na=nun  
 先生-様=NOM 尋ねる-PRES.ADN 言葉=LOC 私=TOP  
*ellun~ellun taytaphay-ss-ta.*  
 はやく~はやく 答える-PST-DEC  
 「先生から訊かれたことに私はすぐ返答をした。」
- (22) a. ce=nun kumpang mek-ess-e=yo.  
 私=TOP 今し方/すぐ 食べる-PST-IFRM =POL  
 「私は今し方, 食べました。」  
 or 「私はすぐに (素早く) 食べました (食べ終わりました) .」  
 (ポン=ミギョン 2005: 128)

- b. ce=nun      kumpang~kumpang      mek-ess-e=yo.  
 私=TOP      すぐ~すぐ      食べる-PST-IFRM=POL  
 「私はすぐに（素早く）食べました（食べ終わりました）。」

なお、以上の (21b) と (22b) における重複の機能を意味の「強調」とのみ捉えるのは説明として不十分ではないかと思われる。ellun~ellun や kumpang~kumpang は多回的に生じた動作に対する分配的なニュアンスを表しうる。つまり、(21b) では『先生から訊かれたこと』は複数個あったが、『私』はいずれの質問にも即答した」というニュアンスを、(22b) では『私』は複数の料理をいずれも素早く平らげた」というニュアンスを持つとするのがより正確な説明であるものと思われる。

ちなみに、kumpang に関して、kumpang は基準時点の直前あるいは直後時点を指す用法と、事態の展開時間の短さを表す用法を持つが（ポン＝ミギョン 2005, 中村 2009）、kumpang-kumpang の意味として自然なのは後者のアスペクト的用法が表す「事態の展開時間の短さ」の「強調」であり、前者の時制的用法の「強調」ではないようである。

### 3.3 3 節のまとめ

3 節では、「強調」ニュアンスに関して、語彙意味として実現されるパターンや、音韻や形態の操作に伴い実現されるパターンを紹介した。その過程で朝鮮語の強調表現に関する先行研究（クオン＝ジェイル 1983, 1987, 1992, イム＝ソッキュ 1989a, 1989b, チョン＝ジョンミ 2008）にも言及したが、それら研究では音韻的、形態的な操作に伴う強調ニュアンスの生起が時間語彙に確認される可能性についてはあまり触れていなかった。本稿の目的である、時間軸において時間的程度性を帯びうる「時間的遠近」の在り方を考えるためにも、次の 4 節ではいくつかの時間語彙を対象として、表現的な「強調」現象の適用可能性を調べる。

## 4 「時間的遠近」の表示と「強調」の関わり

4 節では「時間的遠近」に関する朝鮮語の時間語彙が「強調」ニュアンスを帯びる可能性について考えてみる。調査対象は以下の 11 個の時間語彙とする（表 2）。なお、『標準国語大辞典』の記述によると、いずれの語彙も音韻的に短母音からなる。

各語彙における「母音の長音化」「形態の重複」の実現について、その自然さを朝鮮語の母語話者に確認した（大韓民国ソウル特別市出身 / 在住 20 代男性 2 名、江原道東海市出身 / 在住 20 代男性 1 名）。

表2 調査対象とする時間語彙 (11 語)

遠近の表示	時間語彙
明示	mak 「ちょうど, (～した) ばかり」
	kas 「(～し) たて」
	kot 「すぐ, 直ちに」
	palo 「すぐ, 直ちに」
	ellun 「すぐ, はやく」
	tangcang (當場) 「その場で, すぐ, はやく」
含意 / 明示	kumpang (今方) 「今し方; すぐ, はやく」
含意	akka 「さっき」
	cikum (只今) 「今」
	pangkum (方今) 「今し方」
	ittaka 「あとで, 後ほど」

「母音の長音化」に関して, 各音節で母音の長音化が実現されるかを確認した. また, ニュアンス変化を伴うかも確認した. 「形態の重複」も同様に, 重複の適用可能性とニュアンスの変化可能性を確認した. 調査結果をまとめたものが以下の表3である.

表3 「時間的遠近」の表示に関わる語彙と音韻・形態的「強調」の実現

遠近の表示	基本形	母音の長音化	形態の重複
明示	mak	? ma:k	* mak~mak
	kas	?? ka:s	* kas~kas
	kot	? ko:t	? kot~kot
	palo	pa:lo / palo: / * pa:lo:	palo~palo
	ellun	e:llun / ?? ellu:n / * e:llu:n	ellun~ellun
	tangcang	ta:ngcang / tangca:ng / * ta:ngca:ng	? tangcang~tangcang
含意 / 明示	kumpang	ku:mpang / kumpa:ng / * ku:mpa:ng	kumpang~kumpang
含意	akka	a:kka / akka: / * a:kka:	* akka~akka
	cikum	ci:kum / ciku:m / * ci:ku:m	* cikum~cikum
	pangkum	pa:ngkum / ? pangku:m / * pa:ngku:m	* pangkum~pangkum
	ittaka	i:ttaka / itta:ka / ? ittaka: / ? i:tta:ka / * i:ttaka: / *itta:ka: / * i:tta:ka:	* ittaka~ittaka

まず、「母音の長音化」の実現に関して、遠近を明示する単音節の *mak*, *kas*, *kot* は長音の実現に不自然さが感じられた。一方、同じく明示的な *palo* や *ellun*, *tangcang*, 遠近ニュアンスを含意する *akka* や *cikum*, *pangkum* などでは主に第1音節と第2音節にて長音化が許容されやすい傾向にあった。同一語彙中に長音が2か所以上生じる場合はいずれも実現不可であった。

長音が実現される音節の位置によって、「強調」ニュアンスの発生も影響を受けやすいようである。明示的な *palo* や *ellun*, *tangcang* の場合、第1音節で長音化が起きた *pa:lo* / *e:llun* / *ta:ngcang* は「すぐ」や「はやく」の意味が「強調」され、切迫感や勢いのニュアンスが強まって感じられるようであった。遠近ニュアンスを含意する *akka* の場合は、(16)でも示したように、第1音節の母音の長音化によって「今」との断絶感が強まり、指示する時点がより遠ざかるような印象を与える。*ittaka* でも、*i:ttaka* の場合に相対的に少し遠い未来を指すような感覚を持つという。一方、*cikum* や *pangkum*, *kumpang* ではそのような形態と意味の類像的な関係は見られず、*ci:kum* / *pa:ngkum* / *ku:mpang* では現在性や近接性が強められる。現在あるいはその近傍時点へと(極限に)近づき、ほかでもなく現在を指すような、現在性の際立ちのニュアンスを帯びる。

このように、母音の長音化はさまざまな時間語彙に適用されるものであるが、*akka* や *ittaka* のような母音の長さや時間間隔の長さの類像的相関性が常に見出されるわけではなく、*cikum* や *pangkum*, *kumpang* などのように、母音の長音化によって現在との時間間隔が寧ろ短くなり、現在(あるいはその近傍時点)であることが強められる。

第2音節で長音化が起きた *palo:* / *ellu:n* / *tanca:ng* / *akka:* / *ciku:m* / *pangku:m* / *kumpa:ng* / *itta:ka* では、聴取しやすい明解な発話への心がけとして実現される印象が強いとのことであった。

ちなみに「ちょうど、(～した)ばかり」を意味する時間副詞 *mak* に関して言えば、以下の(23)のように、事態の発生時点を尋ねる疑問詞疑問文に *mak* のみを用いて「今ちょうど到着しました」という意図で答えることが可能である。*mak* のみで答える場合、*mak* は長音でも実現可能であるという<sup>6</sup>。

- (23) X: *encey tochakha-sy-ess-e=yo?*  
 いつ 到着する-HON-PST-IFRM=POL  
 「いつ到着されましたか?」

<sup>6</sup> 「激しく、強く、無闇矢鱈に、いい加減に」を意味する *makwu* および *mak* は、*ma:kwu* や *ma:k* のような表現的長音、*makwu~makwu* や *mak~makwu*, *mak~mak* のような形態の重複が許容されうる。この場合、動作様態の激しさや強さ、無闇矢鱈さなどが強められる。

Y: ma:k (-i=yo.)  
 今し方 (-EV=POL)  
 「ちょうど今 (です。)」

つづいて、「形態の重複」の実現に関して、遠近ニュアンスを含意しうる直示的な語彙形式 akka, cikum, pangkum, ittaka はいずれも重複形を許容しないと判断された。なお, kumpang は時制的な意味「今し方」とアスペクト的な意味「すぐ, ただちに」を持つが, (22) でも述べたように kumpang の重複形 kumpang-kumpang は時制的意味の「今し方」ではなく, アスペクト的な意味の「すぐ, 直ちに」を表す。表 3 で kumpang-kumpang が許容可能と判断されたのも「すぐ, 直ちに」の意味で実現される場合であるため, 遠近ニュアンスを含意しうる直示的な時間語彙は kumpang の時制的用法も含め, 総じて形態の重複が実現不可能であることが分かった。一方, 遠近を明示する形式では相対的に許容されやすい傾向にあった (palo~palo, ellun~ellun など)。なお, (20b) の程度副詞 nemu~nemu 「とてもとても」のように, 形態の重複によって程度性が強まるような例は時間語彙において明確に観察されたわけではなく, (24) や (25) のような動作に対する多回的で分配的なニュアンスが生じる場合が主であった。

(24) sensayng-nim=i    mut-nun                    mal=ey            na=nun    (=21b)  
 先生-様=NOM    尋ねる-PRES.ADN    言葉=LOC    私=TOP  
 ellun~ellun            taytaphay-ss-ta.  
 はやく~はやく    答える-PST-DEC  
 「先生から訊かれたことに私はすぐ返答をした。」

(25) ce=nun    kumpang-kumpang    mek-ess-e=yo.                    (=22b)  
 私=TOP    すぐ~すぐ                    食べる-PST-IFRM=POL  
 「私はすぐに (素早く) 食べました (食べ終わりました) .」

形態重複の適用に関して, 遠近ニュアンスを明示する語彙と含意的な語彙で差異が見られた要因として, 「直示性」が関与するのではないかと考えられる。遠近ニュアンスを含意する語彙はいずれも発話時を基準として事態の時間的位置付けを図る直示的な語彙である。この場合, 基準時点である発話時と事態時との関係は絶対的に一つに定まる。そのため, 形態の重複に伴って生じる事態の多回の実現のニュアンスと時間的な位置関係が絶対的に一つに定まる直示的時間関係は本質的に矛盾しうる。一方, palo や ellun, kumpang などの明示的な表示形式は, 発話時以外にも他の参照時を設定



し、事態時と参照時との時間関係を修飾することのできる非直示的な語彙である。したがって、事態が多回的に実現されたとしても、参照時も相対的に個別に設定可能であるため、直示的な語彙とは異なり、形態の重複に伴う特別な分配的ニュアンスを許容しうる。遠近ニュアンスの明示性と非直示性との関連は「時間的遠近」の表示を考える上で重要な視点の一つとなりうる。

以上、調査結果をもとに分析と考察を試みたが、**mak** と **kas** については加えて考えるべきことがある。この二つの語彙は遠近ニュアンスを明示する点で **kot** や **palo**, **ellun**, **tancang** などと通ずるものの、「母音の長音化」と「形態の重複」を許容しにくい傾向が見られた。これには **mak** と **kas** の文法化の進展度合いが関連している可能性がある。

まず、**mak** と **kas** は統語的に出現可能な位置が **kot** や **palo**, **ellun**, **tancang** などと比べて制限的である。**kot** や **palo**, **ellun**, **tancang** などは動詞句から比較的離れた文頭などの位置でも出現可能であるのに対して、**mak** や **kas** は動詞句の直前あるいはその近傍での出現に限られる。

また、形態論的な特徴として、**mak** と **kas** は接辞的にも使用されうる（例: **kas-palki** 「夜明け頃」、**mak-nay** 「末っ子」）。接辞用法をもたない **palo** や **ellun** などに比べると、形態素としての拘束性は強いといえる。

意味的には、**kot** や **palo** は時間的意味だけでなく、空間的近接性や論理的整然性など、さまざまな概念領域に適用可能である。しかし、**mak** や **kas** は（共時的には）専ら時間的意味として使用され、指示可能な概念領域もより制限的である。

総合的に見て、**mak** と **kas** は **kot** や **palo**, **ellun**, **tancang** などに比べ、相対的に文法化度合いが高く、語彙らしさがやや薄く感じられる。そのような文法化の進展度合いの高さは音韻や形態などの表現的な「強調」現象の適用制限の傍証として関与し、表 3 の調査結果に繋がった可能性がある<sup>7</sup>。

ここまで、「時間的遠近」の形式における表現的な「強調」現象の適用を調査し、分析と考察を行なった。内容は次のようにまとめられる。

- (26) a. 「母音の長音化」は **mak** や **kas**, **kot** を除いて、おおむね適用可能である。  
 ただし、意味的な「強調」ニュアンスをもたらすのは第 1 音節における長音化の場合が殆どである。

<sup>7</sup> **kas** と **mak** の意味的分析に対して匿名査読者よりご指摘をいただいた。すなわち、**kas** と **mak** は参照時点における事態の性質（つまり、結果状態）を表すため、事態時と参照時との「時間的遠近」が捨象され、長音化による遠近の調節が許容されなくなった可能性があるというものである。動作と結果状態の関係に基づく意味的考察として妥当である可能性はあるが、現段階ではこの可能性に対して明確な賛否を示すことは容易でない。「強調」表現の適用制限をもたらす直接的な動機に関する検証は今後の課題とする。

- b. 「形態の重複」は遠近ニュアンスを含意する直示的時間語彙には適用不可だが、明示的な非直示的語彙では許容されうる（遠近ニュアンスの明示性と非直示性の関連）。
- c. 「時間的遠近」を明示する **mak** と **kas** の高い文法化度合いは、表現的な「強調」現象の適用制限の傍証となりうる。

## 5 おわりに

本稿では、朝鮮語の時間語彙が音韻的・形態的な操作を通じて「強調」的なニュアンスを帯びる可能性を検証した。時間性と程度性は相互に結び付けられることは少ないが、「時間的遠近」および「強調」という性質を介して考えることで両者の関係の一端を窺うことが可能となる。程度や状態と関連しやすい「強調」の視点から「時間的遠近」の強調可能性を考えるということは、時間という概念が主観的認識性に基づいた程度的要素を帯びる可能性を検証することに繋がるが、本稿では表現的な「強調」として「母音の長音化」と「形態の重複」の二つを取り上げるにとどまった。その二つ以外にも、(11a) に示すような「子音の硬音化」や、「音節末への阻害音添加」などの音韻的現象によっても、「強調」のニュアンスが生じる可能性は存在する。その他の表現的な「強調」に対する調査と分析を今後の課題とする。また、調査対象とする語彙形式の数や種類を増やすことで、どのような結果が得られるのかについても今後考えるべきである。

### 略号一覧

-	接辞境界				
=	接語境界				
ACC	accusative	対格	LOC	locative	場所格
ADN	adnominal	連体	NOM	nominative	主格
COP	copula	コピュラ	POL	polite	丁寧
DEC	declarative	平叙	PRES	present	現在
EV	epenthetic vowel	挿入母音	PST	past	過去
HON	honorific	尊敬	SEQ	sequential	継起
IFRM	informal	非格式	TOP	topic	主題
INF	infinitive	連用			

## 参考文献

<日本語文献（五十音順）>

川畑祐貴 (2021) 「基準時直前の事態であることを表す朝鮮語の時間副詞について」 修士論文, 京都大学.

川畑祐貴 (2022) 「朝鮮語の時間副詞にみられる時点表示と認識的要素の関連について」 朝鮮学会第73回大会口頭発表, オンライン, 2022年10月2日.

中村麻結 (2009) 「類義関係にある時間副詞について—방금と금방—」 油谷幸利先生還暦記念論文集刊行委員会 (編) 『朝鮮半島のことばと社会—油谷幸利先生還暦記念論文集』 56-103. 東京: 明石書房.

<英語文献（アルファベット順）>

Bhat, D. N. Shankara (1999) *The prominence of tense, aspect and mood*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Bolinger, Dwight (1961) *Generality, gradience, and all-or-none*. 's-Gravenhage: Mouton.

Botne, Robert (2012) Remoteness distinctions. In Robert I. Binnick (ed.) *The Oxford handbook of tense and aspect*, 536-562. Oxford: Oxford University Press.

Botne, Robert and Tiffany L. Kershner (2008) Tense and cognitive space: On the organization of tense/aspect systems in Bantu languages and beyond. *Cognitive linguistics* 19(2): 145-218.

Comrie, Bernard (1985) *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.

Dahl, Östen (1984) Temporal distinction: Remoteness distinction in tense-aspect systems. In Brian Butterworth, Bernard Comrie and Östen Dahl (eds.) *Explanations for language universals*, 105-122. Berlin/New York: Mouton.

Dahl, Östen (1985) *Tense and aspect systems*. New York: Basil Blackwell.

Evans, Vyvyan (2004) *The structure of time: Language, meaning and temporal cognition*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Gil, David (2005) From repetition to reduplication in Riau Indonesian. In Bernhard Hurch (ed.) *Studies on reduplication*, 31-64. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Johanson, Lars (2003) Evidentiality in Turkic. In Alexandra Y. Aikhenvald and R. M. W. Dixon (eds.) *Studies in evidentiality*, 273-290. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Kawahara, Shigeto and Aaron Braver (2014) Durational properties of emphatically lengthened consonants in Japanese. *Journal of the International Phonetic Association*, 44(3): 237-260.

Ko, Eon-Suk (2017) The phonology and semantics of expressive lengthening in Korean. *Studies in phonetics, phonology and morphology*(음성 · 음운 · 형태론 연구) 23(3): 325-347.

- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1999) *Philosophy in the flesh: The embodied mind and its challenge to Western thought*. New York: Basic Books.
- Meermann, Anastasia and Barbara Sonnenhauser (2015) Distance: Between deixis and perspectivity. In Barbara Sonnenhauser and Anastasia Meerman (eds.) *Distance in language: Grounding a metaphor*, 37-66. Cambridge: Cambridge Scholars Publishing.
- Mithun, Marianne (1999) *The languages of native North America*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Moore, Kevin Ezra (2004) Ego-based and field-based frames of reference in space and time metaphors. In Michel Achard and Suzanne Kemmer (eds.) *Language, culture and mind*, 151-165. Stanford: CSLI Publications.
- Moore, Kevin Ezra (2006) Space-to-time mappings and temporal concepts. *Cognitive linguistics* 17(2): 199-244.
- Nurse, Derek (2008) *Tense and aspect in Bantu*. Oxford: Oxford University Press.
- Quirk, Randolph, Sidner Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- Woodbury, Anthony (1987) Meaningful phonological processes: A consideration of Central Alaskan Yupik Eskimo prosody. *Language* 63(4): 685-740.

<朝鮮語文献 (ハングル順) >

- カン=オンミ [강옥미] (2011) 『한국어 음운론』 파주: 태학사. [韓國語音韻論].
- クオン=ジェイル [권재일] (1983) 「현대 국어의 강조법 연구 — 종결어미류 결합의 경우」 『대구어문논총』 1: 23-47. [現代國語の強調法研究 — 終結語尾類結合の場合].
- クオン=ジェイル [권재일] (1987) 「강조법과 그 실현 방법」 『인문과학논총』 19: 57-73. [強調法とその實現方法].
- クオン=ジェイル [권재일] (1992) 『한국어 통사론』 서울: 탑출판사. [韓國語統語論].
- キム=ソン Chol [김선철] (2011) 「국어 형용사와 부사의 표현적 장음화 — 《연세 한국어사전》을 중심으로 —」 『언어학』 59: 51-69. [國語の形容詞と副詞の表現的長音化 — 《延世韓國語辭典》を中心に —].
- キム=チャン Sob [김창섭] (1991) 「‘하다’ 형용사에서 의 표현적 장음」 서울大學校大學院國語研究會 (編) 『國語學의 새로운 認識과 展開: 金完鎭先生 回甲記念論叢』 744-762. 서울: 민음사. [‘hata’ 形容詞における表現的長音].

- キム=チャンソプ [김창섭] (1994) 「국어의 단어형성과 단어구조」 박사학위논문, 서울대학교. [國語の單語形成と單語構造].
- キム=헤림・파크=미니 [김혜림・박민희] (2019) 「현대 한국어 장음의 실현 양상 및 인식 조사 —서울 경기 지역 화자를 중심으로—」 『언어와 문화』 15(3): 79-97. [現代韓國語の長音の實現様相および認識調査 —ソウル京畿地域話者を中心に—].
- ナム=깃탁 [남기탁] (2012) 「국어 한자어 장단음의 발음 양상」 『국어학』 64: 35-63. [國語の漢字語長短音の發音様相].
- 민=ヒョン싱크 [민현식] (1990) 「國語의 時相과 時間副詞 —時制, 相, 叙法の 3 元的解釋論—」 『국어교육』 69: 15-42. [國語の時相と時間副詞 —時制, 相, 叙法の 3 元的解釋論—].
- 민=ヒョン싱크 [민현식] (1998) 「시간어의 낱말발」 『한글』 240/241: 323-354. [時間語の語彙場].
- 파크=미ギョン [박미경] (2016) 「자유발화의 장음화 실현 양상과 기능 연구: 토론·발표 발화를 중심으로」 박사학위논문, 고려대학교. [自由發話の長音化實現様相と機能研究].
- 파크=송진자 [박진자] (1982) 「때어찌씨의 의미분석」 『국어국문학』 18/19: 13-37. [時間副詞の意味分析].
- 페=쥬첸 [배주채] (2011) 『개정판 국어음운론 개설』 성남: 신구문화사. [改訂版國語音韻論概說].
- 폰=미ギョン [봉미경] (2005) 「시간부사의 어휘 변별 정보 연구 —유의어 「방금」과 「금방」의 분석을 중심으로—」 『외국어로서의 한국어교육』 30: 112-139. [時間副詞の語彙辨別情報研究—類義語 「방금」과 「금방」의 分析을 中心に—].
- 폰=우온드크 [봉원덕] (2004) 「국어 시간부사의 통사·의미적 특성 연구」 석사논문, 경희대학교. [國語時間副詞의 統語·意味的 特性 研究].
- 안=비온소프 [안병섭] (2010) 『한국어의 운율과 음운론』 서울: 월인. [韓國語의 韻律と音韻論].
- 우=이네 [우인혜] (1991) 「우리말 시제 상 표현과 시간부사」 『한국어어문학』 9: 161-200. [國語時制 相表現と時間副詞].
- 이=비온겐 [이병근] (1986) 「발화에 있어서의 음장」 『국어학』 15: 11-39. [發話における音長].
- 李崇寧 (1959) 「現代 서울말의 accent 의 考察: 特히 condition phonétique 와 accent 의 關係를 主로 하여」 『서울대학교 논문집』 9: 107-152. [現代ソウル方言の accent 의 考察: 特히 condition phonétique と accent 의 關係를 主にして].

- イム=ソッキュ [임석규] (1989a) 「강조법의 문법적 위상과 변별 기준」 『한글』 206: 115-140. [強調法の文法的位相と辯別基準].
- イム=ソッキュ [임석규] (1989b) 「현대 국어의 강조법 연구」 박사학위논문, 충남대학교. [現代國語の強調法研究].
- イム=ジリョン [임지룡] (2002) 「‘시간’의 개념화 양상」 『어문학』 77: 201-222. [‘時間’의概念化様相].
- イム=チェフン [임채훈] (2003) 「시간부사의 문장 의미 구성」 『한국어 의미학』 12: 155-170. [時間副詞の文章意味構成].
- チョン=ジョン미 [전정미] (2008) 「한국어 구어에 나타난 강조법 연구」 『한말연구』 23: 367-390. [韓國語口語に現れる強調法研究].
- チュ=ヒョン베 [최현배] (1937) 『우리말본』 서울: 정음사. [ウリマルボン].
- ホン=ジョン손 [홍중선] (1991) 「국어의 시간어 연구 - 시간부사를 중심으로 -」 『민족문화연구』 24: 223-245. [國語の時間語研究-時間副詞を中心に-].
- ファン=ウ나 [황은하] (2019) 「세종 구어 말뭉치에 기반한 한국어 표현적 장음 연구」 『어문론총』 82: 237-267. [世宗口語コーパスに基盤を置いた韓國語の表現的長音研究].

< 辞書類 >

国立国語院 『標準国語大辞典』 (<https://stdict.korean.go.kr/>) (最終アクセス 2023/09/27)

< オンライン資料 >

earpearp 社 HP 商品レビューページ

( <https://m.earpearp.com/article/%EC%83%81%ED%92%88-%ED%9B%84%EA%B8%B0/4/185815/>) (最終アクセス 2023/12/13)

## **On the temporal remoteness and its emphasis: A study of temporal words in Korean**

### **Abstract**

This study examines whether and how phonological and morphological expressive emphasis, especially vowel lengthening and morphological reduplication, would be applied to Korean temporal words. In case of vowel lengthening, Korean temporal words excluding *mak*, *kas*, and *kot* are subject to this emphasis. The lengthening at first syllable functions as the emphasis of temporal degree while the lengthening at second or third syllable does not function as such in most cases. As for morphological reduplication, non-deictic words which denote temporal remoteness allow morphological reduplication, while deictic words which connote them do not. Reduplication of temporal words causes the pluralization of stated events and situations on the time line, rather than strengthen the degree of temporal remoteness.

**Keyword:** temporal remoteness, degree, deicticity, vowel lengthening, reduplication

受領日 2023年10月6日  
受理日 2023年12月14日